

『風姿花伝』（応永 7 年・1400 年～）

序

それ、申楽延年の事わざ、その源を尋ぬるに、あるは仏在所より起り、あるは神代より伝はるといへども、時移り、代へだたりぬれば、その風を学ぶ力、及びがたし。ちかごろ万人のもてあそぶ所は、推古天皇の御宇に、聖徳太子、秦の河勝に仰せて、かつは天下安全のため、かつは諸人快樂のため、六十六番の遊宴をなして、申楽と号せしよりこのかた、代々の人、風月の景を借って、（中略）今に盛んなり。されば、古きを学び、新しきを賞する中にも、全く風流を邪にすることなかれ。ただ、言葉卑しからずして、姿幽玄ならんを、享けたる達人とは申すべきや。まづ、この道に至らんと思はん者は、非道を行ずべからず。ただし、歌道は風月延年の飾りなれば、もつともこれを用ふべし。およそ、若年よりこのかた、見聞き及ぶ所の稽古の条々、大概注し置く所なり。

一、好色・博奕・大酒、三重戒、これ古人の掟なり。

一、稽古は強かれ、情識はなかれとなり。

第一年来稽古条々

七歳

一、この芸において、大方七歳を以て初めとす。この頃の能の稽古、かならず、その者自然とし出すことに得たる風体あるべし。舞・はたらきの間、音曲、もしくは、怒れる事などにてもあれ、ふとし出ださんかかりを、うちまかせて、心のままにせさすべし。さのみに「よき」「悪しき」とは教ふべからず。あまりにいたく諫むれば、童は気を失いて、能物くさくなりたちぬれば、やがて能は止まるなり。ただ、音曲・はたらき・舞などならではせさすべからず。さのみの物まねは、たとひすべくとも、教ふまじきなり。大場などの脇の申楽には立つべからず。三番・四番の、時分のよからんずるに、得たらん風体をせさすべし。

十二三より

この年の頃よりは、はややうやう声も調子にかかり、能も心づく頃なれば、次第次第に物数も教ふべし。まづ、童形なれば、何としたるも幽玄なり。声も立つ頃なり。二つの便りあれば、悪きことは隠れ、よき事はいよいよ花めけり。大かた、児の申楽に、さのみに細かなるまねなどは、せさすべからず。当座も似合はず、能も上がらぬ相なり。ただし、堪能になりぬれば、何としたるもよかるべし。児といひ、声といひ、しかも上手ならば、なにかは悪かるべき。さりながら、この花はまことの花にはあらず。ただ時分の花なり。去れば、この時分の稽古、すべてすべて易きなり。さるほどに、一期の能の定めにはなるまじきなり。この頃の稽古、易き所を花に当てて、わざをば大事にすべし。はたらきをも確やかに、音曲をも、文字にさはさはと当たり、舞をも手を定めて、大事にして稽古すべし。

十七八より

この頃はまた、あまりの大事にて、稽古多からず。まづ、声変りぬれば、第一の花失せたり。体も腰高になれば、かかり失せて、過ぎし頃の、声も盛りに、花やかに、やすかりし時分の移りに、手立はたと変りぬれば、気を失ふ。結句、見物衆もをかしげなる気色見えぬれば、恥かしさと申し、かれこれ、ここにて退屈するなり。このころの稽古には、指をさして人に笑はるるとも、それをばかへりみず、内にては、声の届かんずる調子にて、宵・暁の声を使ひ、心中には願力を起して、「一期の境ここなり」と、生涯にかけて能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、そのまま能は止まるべし。そうじて、調子は声によるといへども、黄鐘・盤渉を以て用ふべし。調子にさのみかかれれば、身形に癖出で来るものなり。また、声も年寄りて損ずる相なり。

二十四五

この頃、一期の芸能の定まる初めなり。さるほどに、稽古の境なり。声もすでに直り、体も定まる時分なり。されば、この道に二つの果報あり。声と身形なり。これ二つは、この時分に定まるなり。歳盛りに向かふ芸能の生ずるところなり。さるほどに、よそ目にも、「すは、上手出で来たり」とて、人も目に立つるなり。もと名人などなれども、当座の花にめづらしくして、立合勝負にも一旦勝つ時は、人も思ひ上げ、主も上手と思ひ染むるなり。これ、かへすがへす主のため仇なり。これも、まことの花にはあらず。年の盛りと、見る人の、一旦の心のめづらしき花なり。まことの目利きは見分くべし。この頃の花こそ、初心と申す頃なるを、極めたるやうに主の思いて、はや申樂に側みたる輪説をし、至りたる風体をする事、あさましき事なり。たとひ、人も褒め、名人などに勝つとも、「これは一旦めづらしき花なり」と思ひ悟りて、いよいよ物まねをも直ぐにし定め、名を得たらん人に事をこまかに問ひて、稽古をいやましにすべし。されば、時分の花を、まことの花と知る心が、真実の花に、なほ遠ざかる心なり。ただ人ごとに、この時分の花に迷ひて、やがて花の失するをも知らず。初心と申すはこの頃の事なり。一、公案して思ふべし。我が位の程をよくよく心得ぬれば、それ程の花は一期失せず。位より上の上手と思へば、もとありつる位の花も失するなり。よくよく心得べし。

三十四五

このころの能、盛りの極めなり。ここにて、この条々を究め悟りて、堪能になれば、定めて天下に許され、名望を得べし。もし、この時分に、天下の許されも不足に、名望も思ふ程なくば、いかなる上手なりとも、いまだまことの花を極めぬ為手と知るべし。もし極めずば、四十より能は下がるべし。それ、後の証拠なるべし。さるほどに、上るは三十四五までの頃、下がるは四十以来なり。かへすがへす、この頃天下の許されを得ずば、能を極めたりとは思ふべからず。ここにてなほ慎むべし。この頃は、過ぎし方をも覚え、また、行く先の手立をも覚る時分なり。この頃極めずば、この後天下の許されを得ん事、かへすがへす難かるべし。

四十四五

この頃よりは、能の手立、大かた変るべし。たとひ、天下に許され、能に徳法したりとも、それにつけても、よき脇の為手を持つべし。能は下がらねども、力なく、やうやう年闌け行けば、身の花も、よそ目の花も失するなり。まづ、すぐれたらん美男は知らず、よき程の人も、直面の申樂は、年寄りては見られぬものなり。さるほどに、この一方は欠けたり。この頃よりは、さのみに、細かなるものまねをばすまじきなり。大かた似合ひたる風体を、やすやすと、骨を折らで、脇の為手に花を持たせて、あひしらひのやうに、少な少などすべし。たとひ脇の為手なからんにつけても、いよいよ、細かに身を砕く能をばすまじきなり。何としても、よそ目花なし。もし、この頃まで失せざらん花こそ、まことの花にてはあるべけれ。それは、五十近くまで失せざらん花を持ちたる為手ならば、四十以前に天下の名望を得つべし。たとひ天下の許されを得たる為手なりとも、さやうの上手は、ことに我が身を知るべければ、なほなほ脇の為手をたしなみ、さのみに身を砕きて、難の見ゆべき能をばすまじきなり。かやう我が身を知る心、得たる人の心なるべし。

五十有余

この頃よりは、大かた、せぬならでは手立あるまじ。「麒麟も老いては土馬に劣る」と申す事あり。さりながら、まことに得たらん能者ならば、物数はみなみな失せて、善悪見所は少なしとも、花は残るべし。亡父にて候ひし者は、五十二と申しし五月十九日に死去せしが、その月の四日の日、駿河の国、浅間の御前にて法樂仕る。その日の申樂、ことに花やかにて、見物の上下、一同に褒美せしなり。およそ、その頃、物数をばはや初心に譲りて、やすき所を少な少など、色へてせしかども、花はいや増しに見えしなり。これ、まことに得たりし花なるがゆゑに、能は、枝葉も少なく、老木になるまで、花は散らで残りしなり。これ、眼のあたり、老骨に残りし花の証拠なり。

年来稽古条々以上

『いっしょにお茶を』抄 ※1

――『風姿花伝』「物まね条々」になぞらえて再構成

一 女

闌けし秋おんなざかりの帽子にはかなしみ隠す魔法ありたり
がら一ん橋 このさき行かばずど一ん橋 暗渠にかかる戸板のごとき
秋桜に男来たりてなぎ倒し勝手な雲のかたち見ている
この道ゆかば何かある否何もないあきらめてみよと夕茜雲
放置自転車 後輪の泥に頬よせて傾いた気をつけの曼珠沙華
まんじゅさげ刺さったらしい咳をききその夜の眠りはなはだ紅し
どうやって帰っただろう 駅までをゆうやけぐもに乗ったんじゃないかな
ほどかる帯を締めいしとおき旅かなしみにぬめりてふとよみがえる
かなしみはひとを汚すと知るからに泣き泣きのぼる四十の坂を
ぬばたまの川は鏡の街あかり一度なければ二度もなき逢い
きらら硝子に本物探しに飛びこんで怪我してかえる子供のようにだ
選んだはずなのに言葉ただ愛されたいだけなのに屈曲の月を君も観ている
わたくしは行方ひとすじの忘れ川だからくり返すおなじあやまち
絶望を描いて仕事にしなさんな川はあしたも流れてゆくし
あたためた手が間に合うようにこんなふうにおまえのこころ掬びたかった
自動車と自転車が背中追い越して骨で泣きつつ渡れこの橋

二 法師

でる ときどきする いる いやはった 二十年、窪のいちばん深きにいやはる
きょうはおらんやろ想うた雨にいやはってそのころざし深きは知る
銅釜に厨の水の打ちしぶき一九八三年夏の出来事
ものすごく冷たかったとおもいます線路の下に座りつづけて
十三から中津を揺らる傷痕軍人もろとも晴れしみずのうえを渡る

三 修羅

今年あったいいことなめに蝋燭の数だけ愛を告げ合いましょう
ろうそくの明かりの芯で揺らぐのは人のなかなるけだものの性（さが）
電飾が樹木をさらに暗くした もともとくらしいのちというは
探されたき子供のようにふり返る隠しもならぬ闇をもつ人
あの家は怪我をした子がこもる家みずのなかだけ窓がひらいた
ふたり聴く落ち葉の音はおおきくてやさしい音で交叉し合える
あるがまま死んださかなの持ちおもりエメラルドグリーンにただその目ひかる
本当とは糠床が夏冷たくて冬あたたかいというようなこと
熱い熱い雪崩しているへらで割るお好み焼の内側で母子
小雨に濡れた夜のごはんは息子製 水と油の喧嘩が見物
男の子産み大切に育てし後すずしろの断罪に母は遭う

甘くして味強くする玉子焼この子に幸の多からんこと
里芋の頭寄せ合い根は白し昨日のことを今日に繕わず
烏賊一杯まな板に今宵どこまでも透き通りたい私がいる

四 直面

白夜 往来の奥処ゆくりなく見し夢のごと我が友が来る
ふた親をすでに亡くしし友なりきポケットに手を入れて歩み来
ジョーカーが来たりてジャックいなくなる トランプみたいありふれた夜
わたしのなかのひとりの少女 少女のなかのわたしはひとり トランプみたい
いまだわれはナースチェンカのあてどなさ けだものの背を踏むように白夜

五 鬼

その夜むらさめを聴き目瞑れば仏も鬼も過ぎ二千年
ゆかねばならぬのでござるが別にゆかなくともよかったでござる村雨の道
にせごろもなれど穏しくいまは着んブルースのようにうたえ今朝の歌

六 物狂

ケルベロスには蜂蜜ソップ夜をこめてわれに林檎の香は降り注げ
信号を待ちてしをれば夕水のうえをまたいで何処の夫婦
耳から洗い丁寧に拭い柵越しに歩きつづけたきんぼうげの原
大原の宿は湯気立つぼたん鍋そうならなつたで食むは止めずき
怪我をした君もわたしも血かたまり肉盛ればそのうえにまた逢う
いのししの肉ではなくて観音のふとももなりしという説話あり
布団の傷かぞえ手当をして過ぎきいまふるさとは迎え火の頃
数うれば五十一箇所傷みあり高校のシャツ当て布に縫う
子守歌おしなべて歌いさしたれば最後の一節は布団が聴く
男が女に逢いにゆくのに理由なし夜が暗いとそうなるけもの
そういうもんだとわかってなくちゃいけなくて梅薫る夜の黒に抗う
浮橋の半ばで降りてわたしだけ夢の終わりに遅れてしまう
あなたには読まれたくなき反古（ほうぐ）にはお醤油のしみ月が見ていた
あばら骨きしむ吊り橋あのふたり白い日傘が先立ちてゆく
いまひとたび逢わんと言っておおかたは逢わずなりゆく檻樓の駅に
あなたには全部話してしまいたい 待避線いま浮かびあがり
でもね、でもね、逆接の枕木なお敷かれ一刻のあらし過ぐるまで待つ
いまだ言葉に感じやすく穂をぬらしけぶり増されり吾亦紅の雨
心中を遂げんにあまり小さな手橋桁に檻樓のきばなこすもす
通り過ぎた歳月の奥 線路がね 繋がり光るといふ白日夢
ぬかりなく遂げたき仕事あるごとく籠中の花の灯心を秘す

An Atom 原子 (2008年11月2日、東京ポエトリー・フェスティバル2008) ※2

by Yasuko Tatsumi 辰巳泰子

English translation by Hideaki Matsuoka & Jack Galmitz 英訳 松岡秀明 & ジャック・ガルミッツ

1.

At the peak of labor pains
I cursed;
all men should die
at war.

男らは皆戦争に死ねよとて陣痛のきはみわれは憎みぬき

2.

At noon
simmering a pinch of rice
Rain starts pouring
more silently than
babys breathing.

3.

Turns over
in his sleep showing Mongolian spot
in blue;
The baby has back
though it is small...

4.

What was smaller than breast
was babys head.
And
his wrist was thinner
than his fathers thumb.

5.

The darkness
seems clinging
to his soul;
my infant closes his eyes
biting a nipple.

6.

Suckle !
quickly and strongly
as my two breast are hurting
as if they were competing with each other
in this midnight.

7.

I had recognized myself
as drunken mud;
Why did they let me bear
a flower
in the heaven ?

ひとつまみの穀煮てまひる昏みゆき子の寝息よりかそかなる雨
蒙古斑あをきを見せて寝返ればちひさきながら背中を持てり
乳房より小さかりしはその頭 ととの親指の太さに手首
ひつたりと闇が足裏を吸ふらしく乳首嚙む子は目を瞑りをり
はやう吸へもつと乳吸へ競ふごとのる深夜の痛みふた房
みづからを酔ひたる泥と識り来しになぜ天上の花を生れしむ

8.

In the wind
I am remembering a woman
in atomic bomb record
who gave her skin-lost breasts
to her suckling !

9.

Under the mid-day sun
lattice doors
make endless shadows
All of sudden
I remember The Death March.

10.

I put a summer hat
down over the eyes of my baby
since in this world
there only exit things
that I dont want to let my baby see.

11.

Air force plane
in a picture book
flies
and burns out
the forest of a sleepig child.

被爆記録に皮膚なきそれを与ふるありと乳飲み児抱きて風のなか想ふ
炎昼につづく格子の影もやう「死の行進」をふとも想へり
夏帽子まぶかく吾子にかぶらしむこの世見せたくなきものばかり
絵本にありし軍用機ゆき幼子のひるの熟睡（うまい）の森を焼き尽す

12.

The freezing night
what God bestowed on me
was not you
but sad and painful sentiment
about you.

13.

In the dawn
I cannot sleep thinking of Somalia.
My existence is heavy
and also…
vain.

かの凍夜神の賜びしは君ならず君のめぐりのせつなさばかり
ソマリアをおもふあかとき眠られぬわが存在もおもたくはかな

14.

A day in which humans are killing each other
there is a swallow
crossing over a sea
fly,
dont look down !

にんげんら屠りあふ日も海渡る燕（つばくらめ）あり地を瞰ずに飛べ

15.

On the street
oranges are piled
over a family
pours
acid rain.

16.

Without recognizing night and day
I stay guarding a child
who stretches arms and feet
as if these were
drooping flowers.

17.

Look !
There is flyng
the fluff of a dandelion
I cannot stop
loving you.

18.

When you grown up
with heavy bones
and thick chest
let me hold you
like this way.

往来は蜜柑積みをり一家族包めるごとく降る酸性雨
日月の切れめなきまで目守りゐる花房のやうな手足垂るる子
愛するほかあらざりしかばたんぼぼの綿毛の旅を瞳に映しやる
骨ふとく胸たくましく育つともかく抱かせよわが死の際に

19.

The place of feces,
urine,wound and blood
from where life comes
where a boy
does not know.

糞尿と傷と血といのちのひとところ永遠（とは）に知ることなき男の子なり

20.

I cant stop
imaging distant war
in red
At the end of mother and child
there should be mothers milk.

21.

Evening glow
is red
because the pain of earth
is reviving;
War I learned is what I cannot teach.

あかあかと遠き戦争想はれぬ母子の終末（いまは）乳があるべし
血の痛み甦るがにあかき夕焼けよ教はりて教へ得ざる戦争

22.

Neither sweet fruit nor flower,
boys are competig with each other
over their height
since
they are annual plants.

あまき実かをる花より丈きそふ げに男（おのこ）とは一年草か

23.

I lost my life without a child
now
I have a child…
like loose bag
that carries sadness.

つらぬきて子を持たぬ生もはや無くだぶだぶとせつなさの袋のごとき子

……………by 辰巳泰子（96期。歌人）

※1 『いっしょにお茶を』 ……2012年、沖積舎。

※2 『アトム・ハート・マザー』（1995年、雁書館）から抄出、東京ポエトリー・フェスティバル2008のために再構成したもの。

※1. 2は、共に辰巳泰子の自著で歌集。